

397

小児R I 局所肺機能検査と横隔膜弛緩症

石田治雄, 林 典, 鎌形正一郎, 上野 滋,
杉谷一宏, 村越孝次, 藤本嘉彦 (都立清瀬小
児病院 外科), 大脇生美, 小林 勝, 藤井
昭彦, 小島 明 (同 放射線), 石井勝己
(北里大 放射線)

核医学の進歩により小児でも成人同様な検査が出来るようになり, 我々も小児に適した検査方法を考え, ^{133}Xe と $^{99\text{m}}\text{Tc}$ MAAを用いたR I 局所肺機能検査を日常の臨床に用いて報告してきた。

小児, 特に乳幼児では, いかに体の動きを抑え, 一定の呼吸をさせるかが問題であるが, 静脈を確保し, DiazepamやKetalarlなどを症例に合わせ適量を使用することでほぼ満足の行く結果を得ることが出来た。このためにV, \dot{V} , \dot{Q} , MTTなど局所肺機能のほかに, 最近では, 呼吸波にself gate をかけることにより肺のphase analysisも行えるようになった。

今回は呼吸に大きな影響を及ぼす横隔膜の疾患である横隔膜弛緩症を対象とし, 我々の経験した24例, 67回の検査データに分析を加え, 呼吸障害の程度, 手術前後の変化などを中心に検討し, また同様な横隔膜疾患であるBochdalek ヘルニア症例と比較し報告する。